CASE 2

演劇を通して未知と出会い、異なる他者と対話し、協働する

海城中学高校（東京・私立）

体験学習推進委員会委員長・国語科主任中村陽一先生

スピード・効率重視の今こそ、時間のかかる対話で合意形成を

海城中学高校では、「対話的なコミュニケーション能力」と「コラボレーション能力」を「新しい人間力」と位置づけ、その育成に取り組んできた。なかでも特徴的なのが、演劇ワークショップ（以下、WS）を各学年で実施していることだ。体験学習推進委員会委員長・国語科主任の中村陽一先生は次のように話す。

「価値観が多様化した現代社会において、互いの違いを前提としながら意思疎通をはかることや、価値観の異なる他者と協働して問題を解決することはますます重要になっています。そうした力の育成に適しているのが演劇WSです。例えば、演劇WSの中で生徒たちは互いの異なるアイデアを擦り合わせながら、観客に伝わる表現を目指し工夫して作品を創作していきます。観客に届く表現に一つの正解があるわけではなく、生徒たちは他者と対話し協働しながら決まった答えのない課題を創造的に解決していきます。その体験を通して対話的なコミュニケーション能力やコラボレーション能力を学ぶことが期待されます」

演劇WSは第一線で活躍している演劇のプロをファシリテーターに迎えて実施している。プロに任せるのではなく、ワークショップデザイナーの資格をもつ中村先生や他の教員が協働してオリジナルのプログラムを創っているのが特徴だ。

中学1年次には、学校内で過ごす時間や登下校などの時間を、互いが安心して快適に生活するためには、どのように他者と関われば良いのかを体験的に学ぶ「安全WS」を実施。年3回行い、例えば初回は、無意識のうちに他者に不快感を与えるシーンを演じた劇と、無意識のうちに自分たちが騒がしくしてしまうシチュエーションとを比較し、無意識を意識化していく。中学2年次には、これまでに出会ったことのない大人の話を聞き、その話を基に自分たちで劇を創り演じる「聞き書きWS」、さらに中学3年次には、修学旅行の思い出を演劇にする「修学旅行WS」を実施している。いずれもグループで取り組み、生徒たちは意見を擦り合わせながら1本2～3分の台本を創り、全員が演者となり舞台に立つ。

「演劇を創る過程で対話は不可欠です。対話による合意形成は時間がかかる面倒なものですが、タイパ・コスパが求められがちな今の時代だからこそ、仲間とじっくり対話し協働する経験をしてもらいたいのです。グループで創作した作品を発表した時に、観客から笑ってもらったり拍手をもらったりすると、生徒たちは本当に嬉しそうな顔をします。多様な価値観をもつ他者と粘り強く対話をして創り上げた作品が観客に伝わったことが嬉しいのでしょう。その経験は、今後他者に向けて何かを表現しようとする際のモチベーションにつながると思います」

高校1年次のワークショップの様子。100分×2回の授業で、架空の職業を演劇に仕立て上げる。

無意識のうちに排除されがちな未知との出会いを演出する

さらに、高校1年次にはキャリア教育の一環として、架空の職業の人材を募集するCMを演劇にして発表するWSを実施。時間管理人、三色巻紙配達人、ひらめきランプ交換人など、与えられた架空の職業について考える。「既存

仲間と話し合いを重ねながらストーリーを創っていく。その過程では、意見の相違や壁にぶつかることも。

取材・文／笹原風花

の職業は調べれば情報が出てきますが、架空の職業については自分の頭で考えなくてはなりません。具体的な仕事内容、利益の生み出し方、やりがいなどを考えることが、自分の職業に対する考え方や大切にしている価値観などに気づくきっかけになっているようです」と中村先生は言う。

集大成となる高校2年次には、沖縄への修学旅行のなかで演劇のWSを行う。「修学旅行を、未知との出会いがある有意義なものにしたい。沖縄で生きる人の生の声を生徒に届けたい」という思いから、同校の教員と現地の劇団員たちが一緒に考案したプログラムを実施している。沖縄の人に「わったーシマ（わたしの地域）」への愛を語ってもらい、生徒たちはその魅力を伝えるCMを創る、という建て付けだ。

「既存のイメージとは異なる沖縄について知ってほしい」と中村先生は言う。

「今の時代は、インターネットのアルゴリズムによって、自分の好みに合った情報や自分の関心事に近い情報ばかりが入ってきます。無意識のうちに、自分とは異なる意見や考え方、知らないものに触れる機会がなくなり、世界が狭くなっていることに危機感を覚えています。未知と遭遇する場面、異なる他者と出会う場面を設けることが、学校教育においても重要だと感じています」

地元の劇団員の協力を得て行われる沖縄での演劇ワークショップの様子。生徒たちは半日間で「わったーシマ」の魅力を聞き出し、CM仕立ての演劇を創り上げる。

偶然性・ランダムネスを設計し、生徒に任せ、生徒を待つ

10年以上にわたり、体験学習の設計・推進に取り組んできた中村先生。演劇という手法を取り入れる意義について、次のように語る。

「違いを尊重しよう、互いを認め合おう、対話を通してコミュニケーションをとろう…と教員が言葉にするだけでは、生徒には届かないでしょう。大切なのは生徒が自分で気づくことであり、その手法として演劇はとても有効です。楽しみながら、自分で考えながら、そして身体を使いながら活動するプロセスを通して、それぞれの気づきや学びを得ることができるからです。WSをデザインする際には、偶然性やランダムネスを設計するよう意識しています。そんな偶発的な経験から生徒が自発的に多くの気づきを得るためには、生徒に任せ、生徒を待つことが大切です。教員が言語化してしまうと、そこで生徒の思考は止まってしまう。あえて言わない。迷ったら、待つ。これは普段の関わりにおいても大事なことだと思います」

今年の夏休みには、初めての取組として、他校の生徒も交えた「サマーワークショップ」を実施した。中学2年生から高校2年生まで、性別も年齢も異なる多様な生徒が集い、共に朗読劇に取り組んだ。中村先生は「今後も異なる価値観をもった他者と出会い、対話をする機会をより多く設けていきたい」と締めくくった。

実践のヒント

- 身体的に学び、自ら気づかせるために、体験学習（演劇）を取り入れる。
- タイパ・コスパ重視ではなし得ない合意形成を体験するために、時間をかけて仲間と対話・協働する場を設ける。
- 未知との遭遇、異なる他者との出会いを通して、「違う」を体感させる。
- 偶然性やランダムネスを設計し、想定外の学びを誘発する。
- 思考を止めないため、生徒に任せ、待つ（教員が言語化しすぎない）。

生徒インタビュー

左：中谷蒼介さん（高校1年生）、右：松尾治輝さん（高校1年生）

わかり合えないなかで共通点を見出すのが面白い

私は模擬国連に参加しているのですが、わかり合えないなかで共通点を見出し、意見を擦り合わせてかたちにしていくプロセスは、まさに演劇と共通しています。また、演劇での学びを活かして、模擬国連や部活などの場でも意見を出しやすい雰囲気づくりを大事にしています。演劇のワークショップではランダムにグループが組まれます。普段あまり話したことのないクラスメイトと意見を交わし合い演劇を創るなかで、お互いの知らなかった一面や意外な一面が見えるのも面白いところです。（中谷さん）

キャラを変えることへの抵抗感がなくなった

最初は演じるのが恥ずかしく、自分のキャラを脱いで役に入り込むことに難しさを感じていました。しかし、次第に慣れて人前で演じる度胸がつき、声も張れるようになり、キャラが変わることへの抵抗感もなくなりました。演劇創りの場では、自分をオープンにすることになるので、お互いのことがよくわかり、仲が深まります。相手と話をする際には、まずは相手の意見を受け入れてから自分の意見を提示することも意識するようになりました。（松尾さん）

学校データ

1891年創立／普通科／生徒数1954人（男子）。
海軍予備校として創立され、1900年に海城学校に改称。創立の理念を受け継ぎ、「新しい紳士」の育成を目指す。